



涌井 史郎（雅之）

国連生物多様性の10年日本委員会・委員長代理

東京都市大学 環境学部 教授

岐阜県立森林文化アカデミー 学長、なごや環境大学 学長

<プロフィール>

昭和20年鎌倉市生まれ。造園・ランドスケープアーキテクトとして「景観十年、風景百年、風土千年」と唱え、人と自然の空間的共存をテーマに多くの作品や計画に携わっている。代表的な仕事には「ハウステンボス」のランドスケーププランニングや、「愛地球博」における会場演出総合プロデューサーがあり、その会場計画や記念庭園の監修に携わっている。

著書「景観創造のデザインデベロップメント」（総合ユニコム）、「景観からみた日本の心」（NHK 出版）、「奇跡と希望の松～なぜ一本の松だけが生き残ったのか」（創英社）など。TBSテレビ「サンデーモーニング」、MBS「ちちんぷいぷい」にコメンテーターとして出演している。

「国連生物多様性の10年日本委員会と、にじゅうまるプロジェクト」

【講演要旨】

このたびこの会議を開催する愛知県・名古屋市は歴史的に環境問題の課題解決に極めて重要な先進的行動をとった地域です。名古屋港湾地域に最後に残された藤前干潟の保全に成功。さらには海上の森で開催予定の2005年万国博覧会開催の会場を移動させ、この博覧会を世界初の環境万博に塗り替えることに成功したことなどです。

そして2010年には、COP-10（第10回生物多様性条約締約国会議）の開催とその成功。つまり2050年の人と自然の共生する社会というビジョンと2020年目標「愛知目標」と、その目標を達成するための国連生物多様性の10年を提唱し、この双方を決議したばかりか、その年の年末には国連総会で「生物多様性の10年」を決議させたのです。また2014年には国連・持続的な環境教育 ESD のとりまとめ会合がこの地で開催されました。

さらに2014年には、全国初の「愛知ミティゲーション方式」による全県エコロジカルネットワーク形成を県条例化したのです。まさに環境施策先進地域と申せましょう。

それというのもこれらの取り組みを通じて、生物多様性の価値とその保全再生の意義をどこよりも深く理解し、我々人類が多様な生物種や生態系から受けている恩恵のほどを深く理解したからに他なりません。

我々の日常は、これらの人類以外の他の生物の働きと恵みに支えられているのです。先の国連決議に従い、多様なステークホルダーが生物多様性の主流化のための共同のテーブルを設けたのが、国連生物多様性の10年日本委員会です。この委員会は国のみならず、自治体、NPO・NGO、経済界やマスコミ、そして一次産業関連の団体などが幅広く集まり、生物多様性の主流化に共同して取り組むとともに、各々のステークホルダー毎にも個別課題に取り組もうとするプラットフォームです。その取り組みは多岐にわ

たります。自治体会合による生物多様性の地域戦略の策定や、多様な企業団体が取り組む、主流化へのアクションを紹介し、顕彰する「アクション大賞」を CEPA ジャパンと共に、また経団連自然保護協議会と共に「生物多様性の本箱」の設置を推進するなど冊子「Iki・Tomo（イキトモ）」の発刊などと併せた活動などがあげられます。

また、去年は、韓国・平昌で COP-12 が開催され、国連決議に対する中間評価がなされました。まだまだ主流化への道半ばということが明確にされました。

そこでとくに着目されたのが、日本で積極的に取り組まれてきた IUCN-J による「にじゅうまるプロジェクト」でした。つまり生物多様性の主流化は、そんなに難しいことではなく、我々の日々の暮らしの視点を少しかえるだけで十分な可能性があるということを啓発する取り組みだからです。しかも生物多様性の意味を理解し、そうした取り組みをやるということをも自分自身に宣言をすることにより、さらなる効果を生み出す可能性が高いという評価からの関心です。

一方、日本は災害大国であり、あの東日本大震災から早5年目になろうとしています。昨年仙台で開催された「第3回国連防災会議」では、ECO-DRR つまり自然資本を活用したグリーンインフラを活用して防災・減災に役立てるという方策と事例の提示に最も強い関心が寄せられました。生物多様性の多様な生態系サービスの一つに、これまであまり関心がもたれなかった、防災・減災分野という新たな方向が世界各国の目を開かせたのです。

しかも我が国は、今後人口減少と超高齢化を目前にして、国としての生産力低下を補う方策を様々議論しなければならぬ状況に置かれます。とりわけ環境ストレスは、脆弱な地域や人々に強く働きます。そうした中で、地方創生とも絡めて、取り残されかねない地方の濃密な生物多様性を生かした取り組みが着目されます。生物多様性保全は、生態系・種・個体の遺伝子の多様性を未来に残すという基本的な事柄のみならず、現実の社会に多くの恵沢ももたらすものなのです。時にそれを自然資本財と名付け、時にグリーンインフラと呼んだとしても、そのすべてが生物多様性の保全と尊重について社会総体で取り組む主流化なくしては語れません。

この会合を機会に、皆さんと共に、身近なことから我々の存在が、自然と共生なくしてはあり得ないという認識を深め、共に手を携えて具体的に行動する仲間を増やそうではありませんか。